

国立国語研究所学術情報リポジトリ

理由の接続助詞と終助詞・間投助詞の連接： 首都圏・熊本・倉吉方言を対象に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-01-31 キーワード (Ja): 熊本方言, 倉吉方言, 接続助詞, 間投助詞, 終助詞 キーワード (En): 作成者: 阪上, 健夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000468

理由の接続助詞と終助詞・間投助詞の連接

——首都圏・熊本・倉吉方言を対象に——

阪上健夫

東京大学大学院 博士課程／国立国語研究所 共同研究員

要旨

理由の接続助詞の文末用法には、終助詞に近いものがある。熊本県方言や鳥取県倉吉方言の理由の接続助詞には、首都圏方言で「から」が用いにくく終助詞を用いた方が自然な文末用法がある。これは、接続助詞の終助詞化ないし理由節の主節化の程度に方言差があることを意味する。また、文末における接続助詞と終助詞の連接には、文中での間投助詞との連接とは異なる現象が見られる。本稿ではこの連接に重点を置いて、首都圏・熊本・倉吉方言話者を対象とした面接質問調査の結果にもとづき、これらの方言における理由の接続助詞の文中用法と文末用法の間の連接関係の異同を明らかにする。例えば、熊本県方言では文中の場合「タイ」が間投助詞として理由の接続助詞「ケン」に後続し得るが、文末では専ら「ネ」の類の終助詞が「ケン」に後続する。このことから、文末用法の「ケン」は終助詞「ヨ」「バイ」「タイ」と範例的な対立関係にあることを主張する。*

キーワード：熊本方言、倉吉方言、接続助詞、間投助詞、終助詞

1. はじめに

首都圏方言において、理由の接続助詞は(1)のように文末で使われることがある。加えて、熊本県方言の理由の接続助詞「ケン」や鳥取県倉吉方言の理由の接続助詞「ケー」には、首都圏方言で「から」が用いにくく「よ」の方が自然な文末用法がある。(2)(3)のような例である。

- (1) (会合等で退出する際に) じゃあ、私はこの辺で帰るから。【首都圏方言】
- (2) (雨に気付き知らせる時) あら、雨の降りよるケン。¹【熊本方言】(和田 2009)
- (3) (布団の上に乗る子供に腹が立って) ほおんに 腹がわりいけえ。【倉吉方言】(小矢野 2017)

これは、接続助詞の終助詞化ないし理由節の主節化の程度に方言差があることを意味する。この接続助詞の終助詞化ないし理由節の主節化には、(4)に挙げる2つの要素がある。

* 本研究にご協力くださった山田高明先生・桑本裕二先生および方言話者の方々、並びに方言話者を紹介してくださいました坂井美日先生・野間純平先生に深く感謝を申し上げる。本研究はJSPS科研費17K02777, 21K18376, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」(プロジェクトリーダー: 山田真寛)の助成を受けている。

¹ 例文を引用する場合は基本的に分かち書き等を出典のままにしている。

(4) ①用法・意味
②終助詞・間投助詞との連接関係

①は接続助詞の意味に関わる要素で、②は他の形式との共起関係を表すため接続助詞の形式に関わる要素である。2.2節で述べるように、阪上(2023)は①の用法・意味の側面から熊本県方言の「ケン」を記述・考察したが、本稿では②の連接関係に重点を置く。

理由の接続助詞が文末で使用される場合、(5)のように終助詞が連接することがある。

(5) 遅くに出かけてお化けに会っても知らないからね。【首都圏方言】

この文末用法の「から」と終助詞の連接には、文中用法の「から」と間投助詞の連接と異なる現象が見られる。例えば文中用法の場合は(6)のように「さ」が後続できるが、文末用法では「さ」が後続しにくい場合がある。(5')のように「からさ」を用いると不自然になる。これは、「さ」が後続すると終助詞ではなく間投助詞に見えるが、後に続く内容が考えにくいためだと思われる。

(6) 地面が濡れているからさ、雨が降ったんだろうね。【首都圏方言】

(5') ?遅くに出かけてお化けに会っても知らないからさ。【首都圏方言】

また、接続助詞の文末用法の分類は、白川(2009)が言語形式的に主節が表現されないものを「言いさし」としている。加えて、言いさしの中でも「ご飯が美味しいね。」という発話に対する「今日はよく働いたから。」のように、文脈の中に主節として関係付けられる内容があるものは「関係付け」とする。一方、文脈中に主節相当の内容が見出しがくい「ちょっと煙草買ってくるから。」のような用法は、それだけで意味的に完結する「言いつくし」とされている。本稿では白川(2009)で「言いつくし」とされているような文末用法を考察対象とする。

方法としては首都圏・熊本・倉吉方言話者を対象とした面接質問調査の結果にもとづき、これらの方言における理由の接続助詞の文中用法と文末用法の間の連接関係の異同を明らかにする。次節では理由の接続助詞の文末用法や終助詞・述部のモダリティ構造に関する先行研究を示し、第3節で調査方法を述べ、第4節で調査結果を示す。第5節ではそれに基づいて首都圏方言の「カラ」、熊本県方言の「ケン」、倉吉方言の「ケー」の文中用法と文末用法の連接関係の考察を行い、第6節で結論と課題を述べる。

2. 先行研究

2.1 首都圏方言の「から」の文末用法と終助詞の連接

首都圏方言の「から」は、許(2002)が「今川焼、ここ置いとくからね」という例を挙げて指摘しているように、文末用法において「ね」が付き得る。また、白川(2009:167)は「から」の言いつくし文に対するモダリティ形式を伴う独立文と平行性があるとして、「煙草買ってくるか

ら」が「煙草買ってくるよ」とも言えるように終助詞との言い換えも可能とする。しかし、こういった終助詞との連接関係の詳しい説明はない²。

2.2 熊本県方言の接続助詞「ケン」および終助詞

続いて、熊本県方言の理由の接続助詞「ケン」と終助詞の先行研究を示す。阪上（2023）では「ケン」の文末用法を首都圏方言の「から」よりも抽象化した、「話し手の確信的な事態の一方的な知らせ」という対人的モダリティの意味で主節に付加するとした。(7)のような構文である。

(7) (雨が降っていることに気付き知らせる時) ア アメガ フットルケン。 (阪上 2023)

そして、終助詞との連接形の「ケンネ」「ケンナ」を、阪上（2023）では(8)のように話し手の確信的な認識に言明して聞き手との共有を確認する意味機能を持つものとした。一方(9)のような話し手にとって不確かな情報の確認では「ケンネ」が使えない。

(8) A: 阿蘇山から見える景色は良かったよ。B: アレワ ヨカケンネ。 (阪上 2023)

(9) (不確かな情報を確認する際) コトシノ ブンカサイワ チューシ {ヨネー/*ダケンネ}。

多少の制約はあるが、熊本県方言の「ケン」は首都圏方言の「から」より終助詞化が進んでいくと思われる。そのために首都圏方言で終助詞が使える例でも「ケン」が使えると言える。

また、熊本県方言の終助詞には(10)(11)のように「バイ」や「タイ」がある(秋山 1983: 226, 神部 1991: 275)。和田(2009)は「タイ」に(12)のような間投助詞的用法もあるとする。

(10) オリヤー モー イヌッ バイ。 (おれはもう帰るよ。) (神部 1992: 41)

(11) ショーノ ナカ タイ。 (しようがないさ。) (神部 1992: 41)

(12) あそこの郵便局でタイ、山田さんにあつたと。 (和田 2009: 1)

また、終助詞の連接形には、藤原(1986: 67-70, 404), 神部(1992: 52)等によると「タイナ」「タイネ」「バイナ」「バイネ」といった形がある。

2.3 鳥取県倉吉方言の接続助詞「ケー」

鳥取県倉吉方言の理由の接続助詞「ケ(一)」の文末用法は、小矢野(2017)が(13)のような例を挙げている。

(13) (今年の梨の出来を聞かれて) 今年か! それが どだい いけんかったけ。

² 許(2002)や白川(2009)は首都圏方言を地理的基盤とした全国共通語を対象としているが、本論ではこれを「首都圏方言」とみなす。

(今年ですか？それがねえ、まったく駄目でしたね) (小矢野 2017)

こういった例を受けて、小矢野（2017）は文末形式「ケー」を聞き手に発話内容を強く伝える態度を表すものと結論付ける。また、湯浅（2003: 130, 2004: 64-70）は「ケナー」「ケーナー」は話し手の最も伝えたい情報に付くとして、（14）のように聞き手の知らない情報を伝えるのみの用法もあるとしている。そして「ケナー」「ケーナー」を話者が際立たせたい情報の指標とする。

- (14) ウチノ子ワ ホンニ ジットシトレンダケナー キノーモ 目離シタ隙ニ
橋ノホーマデ 出トッタダケーナー… (うちの子は本当にじつとしていられなくてね,
昨日も目を話した隙に橋の方まで出ていたんだよ) (湯浅 2004: 70-71)

訳から分かる通り、これらの例も（7）（8）と同様に首都圏方言では終助詞が自然となる。こういったことから、鳥取県倉吉方言の「ケ」「ケー」も首都圏方言より終助詞化が進んでいくと思われるが、どういう場合に使えてどういう場合に使えないのか、はつきり分かっていない。

2.4　述部のモダリティ表現の階層と連接関係

先に触れた終助詞の連接にはモダリティ階層が関わる。渡辺（1953, 1968），林（1960），南（1993）によると述部の構造はいくつかの階層に分かれる。前の方ほど事態の論理的関係に関わり、末尾ほど話し手の態度や情意に関わるとされる。この話し手の判断や態度の表現は仁田（1991），益岡（1991, 2000）等でモダリティとされ、聞き手への働きかけを表す終助詞はモダリティ形式に含まれる。陳（1987）も終助詞を話し手と聞き手の認識のギャップを埋めるものとする。加えて、渡辺（1968）や南（1993）は終助詞に「か」「さ」「わ」→「よ」→「な」「ね」といったモダリティの階層構造があるとしている。本論ではこういった階層構造を踏まえて文末における接続助詞と終助詞の連接関係を明らかにし、文中における間投助詞との連接関係と比較する³。これによって理由の接続助詞の終助詞化を、他の助詞との連接・範列関係から示すことができる。

3. 調査方法

面接質問調査を2022～2024年に首都圏方言話者5名と熊本方言話者8名と倉吉方言話者3名を対象に実施した。まず、首都圏方言話者に「から」や終助詞・間投助詞の容認度を尋ねた。首都圏方言話者・熊本方言話者⁴・倉吉方言話者の情報を（15）に記す。

- | | | |
|----------------|-------|----|
| (15) 言語形成期の居住地 | 生年 | 性別 |
| 首都圏 A：東京都江戸川区 | 1995年 | 男性 |

³ 終助詞同士の連接もモダリティ階層に関わるが、これは意味・用法に関わる問題なので今後の課題とする。

⁴ 同じ熊本県内でも異なる地域出身の話者を含むが、接続助詞「ケン」に関する現象は熊本県内で広く見られるので、一括して「熊本方言」とする。また、熊本方言話者は年齢の幅が広いが、世代差は見られなかった。

首都圏 B : 神奈川県厚木市	1998 年	男性
首都圏 C : 神奈川県相模原市	1998 年	男性
首都圏 D : 東京都新宿区	1999 年	女性
首都圏 E : 神奈川県厚木市	1999 年	男性
熊本 A : 熊本県熊本市 (調査時に県内在住)	1938 年	男性
熊本 B : 熊本県熊本市	1955 年	男性
熊本 C : 熊本県天草郡 (調査時に県内在住)	1957 年	女性
熊本 D : 熊本県熊本市	1986 年	女性
熊本 E : 熊本県八代市	1992 年	男性
熊本 F : 熊本県熊本市	2001 年	女性
熊本 G : 熊本県阿蘇市	2002 年	女性
熊本 H : 熊本県菊池郡	2002 年	女性
倉吉 A : 鳥取県倉吉市 (調査時に市内在住)	1967 年	男性
倉吉 B : 鳥取県倉吉市 (調査時に市内在住)	1968 年	男性
倉吉 C : 鳥取県倉吉市	1970 年	男性

熊本方言・倉吉方言話者を対象とした調査では首都圏方言の例文を方言に訳してもらい、「ケン」「ケー」が使われなかつた場合は「ケン」「ケー」を用いた例文を提示して可否を尋ねた。調査項目は大きく I～III に分かれる。例文は阪上 (2023) で熊本方言の理由の接続助詞の用法を明らかにするために用いたものと同一である。本論ではそれに加えて間投助詞の後接も確認した。まずは I で文中での本来的な用法を確認し、「さ」「ね」といった間投助詞の使用も調査した。

I. 文中の本来的用法

- [1] 今日は日曜日だから, 車通りが多いよ。
- [2] 地面が濡れているから, 雨が降ったのだろう。
- [3] 今お茶でも入れるから, 上がって。
- [4] もうすぐおでんができるから, 待っていて。
- [5] 私がスイカを切るから, 君は盛り付けてくれ。

次に II では首都圏方言の「から」に見られる文末用法を確認する。[1]～[4] は具体的な行為要求にとりやすい例で、[2] は「上がって」、[3] は「少し待っていて」のような含意が解釈できる。一方、[5]～[8] は具体的な行為要求にとりにくく、聞き手に発話内容を知らせる意味機能を持つ。[6]～[8] にあるような「ね」との連接形も尋ねる⁵。

⁵ それ以外の II の項目では接続助詞と終助詞の連接を逐一確認していないが、「ネ」「ナー」等の終助詞が積極的に回答されることがあった。

II. 首都圏方言の「から」に見られる文末用法

- [1] (家族に留守番を頼む意味で) ちょっと買い物に行ってくるから。
- [2] (自宅に来た客に席を勧める時に) 今お茶でも入れるから。
- [3] (人と外出する際, 先に外に出ている人に) 今すぐ靴を履くから。
- [4] (依頼をした後, 別れ際に) それでは, 頼んだから。
- [5] (会合等で退出する際に) では, 僕／私はこの辺で帰るから。
- [6] (家に来た友人に) 帰りは車で送ってあげるからね。
- [7] (部屋を散らかしている家族に) 今日中に片付けておかないと全部捨てるからね。
- [8] 遅くに出かけてお化けに会っても知らないからね。

そしてIIIは首都圏方言では「から」が使いにくく, 終助詞が自然となる例である。IIIでは下線部を空欄にして自由に助詞を補足してもらった。これによって首都圏方言の終助詞ではなく文脈で意味を統制し, 「ケン」「ケー」が使える意味用法を検証できる。IIIの[1]は話し手の知識を知らせるもの, [2] [3] は単にその場で気付いた事態を知らせる例で, これらでは首都圏方言の「よ」が使える。[4]は話し手が経験した事態を表し, [5]は質問に対する応答表現で, ここでも首都圏方言で「よ」が自然となる。また, [6]はその場で生じた評価を独話的に述べる例で, 「わ」や「な」が使える。[7]は聞き手と共有する情報の確認で, 首都圏方言の「ね」が使える。そして, IIIの[8]～[14]では首都圏方言で終助詞の連接形「よね」が使える用例を尋ねる。蓮沼(1992), 野田(1993:10), 日本語記述文法研究会(2003:266)等で「よね」には聞き手との一致を想定して話し手の認識を示し, 聞き手に確認する機能があるとされる。また, 「よね」の用法は話し手の認識を表すものと聞き手の方が詳しい情報の確認を求めるものに分けられる。[8]～[13]が前者, [14]が後者に当たる。話し手の認識を表す用法の項目では[10]のように意見を述べて同意・確認を求める例や, [12]のように聞き手に同意する例を設定した。

III. 首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法

- [1] A: 熊本のからし蓮根が食べたいな。B: 名産品のからし蓮根は高い。
- [2] (雨が降っていることに気付き知らせる時) あ, 雨が降っている。
- [3] (聞き手の襟が立っているのを見て知らせる意味で) 襟が立っている。
- [4] A: あの歌手は紅白歌合戦に出たね。B: 新聞に載っていた。生まれは九州と書いてあった。
- [5] (いつ頃ここに来たかと聞かれて) 僕／私は生まれてからずっとここに住んでいる。
- [6] (一人でスポーツ番組を見て) やっぱりプロの選手はアマチュアと雰囲気が違う。
- [7] (聞き手を自然公園で見た次の日) 昨日自然公園にいた。
- [8] A: 今は耳にピアスをしている人が多いね。
B: でも, びっくりする。この頃は鼻にも穴を開けているんだから。
- [9] (昔一緒に花火大会に行った人と話す際, 同意を求める意味で)
A: それから夏には花火を見に行った。B: そうだったね。A: あの花火は綺麗だった。

- [10] (自身の意見を述べて同意・確認を求める意味で)
A : 今度沖縄に旅行しようよ。B : 沖縄に旅行するなら、問題はお金だ__。
- [11] (旅行に行ってきた A と旅行の話になり、同意する意味で)
A : 阿蘇山から見える景色は良かったよ。B : あれは良い__。
- [12] (高校同期の A と修学旅行の時の話になり、同意する意味で)
A : あの時は他校の修学旅行生が 200 人くらい来ていた。B : あー、多かった__。
- [13] (高校同期の A と修学旅行の時の話になり、同意する意味で)
A : あの時は生徒が夜に外出すると先生が怒った。B : あー、夜間の外出を怒っていた__。
- [14] (不確かな情報を確認する意味で) 今年の文化祭は中止だ__?

4. 調査結果

調査結果を【表 1~3】にまとめた。例文中の下線部に理由の接続助詞が使えると回答されたものに「○」、使えないと回答されたものに×を付ける。接続助詞単独ではなく「ネ」「ナー」が義務的と回答されたものに「ネ」「ナー」を付け、任意に「サ」「ネ」「タイ」「ナー」が後接できると回答された場合に「○(サ)」「○(ネ)」「○(タイ)」「○(ナー)」とする。

4.1 文中用法における間投助詞との連接関係

まず I で確認した文中での本来的な用法について見る。首都圏方言の調査結果を【表 1-1】に示す。「カラヨ」には話者から古風、位相が限られる、乱暴・粗雑な印象があるといった意見があり、首都圏 C 以外は不自然ではないが自分では言わないとする⁶。

表 1-1 首都圏方言：I. 文中での本来的な用法

	A	B	C	D	E
[1] 日曜日	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)	○(ネ)○(サ)
[2] 地面	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)
[3] 上がって	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)
[4] 待って	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)
[5] スイカ	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)	○(ネ)○(サ)

結果を見ると、「カラ」は自然に使え、基本的に間投助詞の「サ」や「ネ」を付けても言える。次に、熊本方言における I の調査結果を【表 1-2】に示す。熊本方言の調査結果は阪上 (2023) のものと重なる部分がある。熊本 A と熊本 D には間投助詞の連接について網羅的に確認していないが、それ以外の話者には全て確認済みで、間投助詞が不適格とされる項目があった。基本的に「ケン」は I で使え、後に間投助詞の「ネ」や「タイ」が付加できる場合もある。I [2] では

⁶ 「サ」「ネ」とは使用状況が異なるため、「ヨ」の結果は表に記していない。

「ミチ ヌレトルケンネー アメン フッタッダロー。」【A】，【4】では「モースグ オデンデキルケンタイ マットッテ。」【H】のように言えるという回答があった。

表 1-2 熊本方言：I. 文中での本来的な用法

	A	B	C	D	E	F	G	H
〔1〕日曜日	○	○(ネ)	○	○(タイ)	○(ネ) ○(タイ)	○	○(ネ) ○(タイ)	○(ネ) ○(タイ)
〔2〕地面	○(ネ)	○	○	○(タイ)	○(ネ) ○(タイ)	○	○(ネ)	×
〔3〕上がって	○(ネ)	○(ネ)	○(タイ)	○(タイ)	○(タイ)	○	○(ネ)	○(ネ) ○(タイ)
〔4〕待って	○	○(ネ)	○(タイ)	○(タイ)	○(タイ)	○(ネ)	○(ネ)	○(ネ) ○(タイ)
〔5〕スイカ	○	○(ネ)	○(タイ)	○(タイ)	○(タイ)	○	○(ネ)	×

そして、倉吉方言の調査結果は【表 1-3】のようになった。〔1〕であれば「キョーワ ニチヨービダケー クルマドーリガ オーイデ。」【B】のように、理由の接続助詞として「ケー」が使える⁷。また、任意に間投助詞「ナー」を後接させることが可能で、〔3〕では「イマ オチャデモイレルケーナー アガットイテ。」【B】のように言える。

表 1-3 倉吉方言：I. 文中での本来的な用法

	A	B	C
〔1〕日曜日	○(ナー)	○(ナー)	○(ナー)
〔2〕地面	○(ナー)	○(ナー)	○(ナー)
〔3〕上がって	○(ナー)	○(ナー)	○(ナー)
〔4〕待って	○(ナー)	○(ナー)	○(ナー)
〔5〕スイカ	○(ナー)	○(ナー)	○(ナー)

4.2 文末用法における終助詞との連接関係

続いて文末用法における終助詞との連接関係について、IIの首都圏方言の「から」に見られる文末用法の調査結果を示す。首都圏方言の結果は【表 2-1】のようになった。IIの一部では「含意が伝わりにくい」という理由で「から」が許容されないが、基本的に「から」が使える。

⁷ 国立国語研究所（1989）による『方言文法全国地図』第33図では、中国地方で「ケー」の他に「ケン」も散見される。そのため倉吉方言話者に「ケン」も使うか尋ねたが、言わないという回答があった。

表 2-1 首都圏方言：II. 首都圏方言の「から」に見られる文末用法

	A	B	C	D	E
[1] 買い物	○	○	○	×	○
[2] お茶	○	×	○	○	○
[3] 靴	○	○	○	○	○
[4] 頼んだ	○	○ネ	×	○ネ	○ネ
[5] 帰る	○	○	○	○	○
[6] 車	○(ネ) ○(サ)	○(ネ)	○(ネ)	○(ネ)	○(ネ)
[7] 捨てる	○(ネ)	○(ネ)	○(ネ) ○(サ)	○(ネ)	○(ネ)
[8] お化け	○(ネ)	○(ネ)	○(ネ)	○(ネ)	○(ネ)

[6]～[8]では「カラ」の後に「ネ」が連接できる。「カラサ」は[6]の「帰りは車で送つてあげるからさ。」であれば「ゆっくりしなよ」といった内容が後にならないと不自然といった意見があり、全体的に容認度は低い。「カラヨ」はIIでも乱暴・粗雑な印象があると回答され、首都圏C以外は不自然ではないが自分では言わないと回答している。加えて、首都圏Cは「カラヨ」も[6]であれば「お酒を飲んでいきなよ」のように後に続く内容がないと不自然としている。

続いて、熊本方言におけるIIの「から」に見られる文末用法の調査結果を【表2-2】に示す。

表 2-2 熊本方言：II. 首都圏方言の「から」に見られる文末用法

	A	B	C	D	E	F	G	H
[1] 買い物	○	○	○	○	○	○	○	○
[2] お茶	×	○	○ネ	○	○	○	○	○
[3] 靴	○	○	○	○	○	○	○	○
[4] 頼んだ	×	○	○(ネ)	○	○	×	○	○(ネ)
[5] 帰る	×	○(ネ)	○	○(ネ)	○	○(ネ)	○	○
[6] 車	○	○(ネ)	○ネ	○(ネ)	○ネ	○(ネ)	○(ネ)	○
[7] 捨てる	○(ネ)	○(ネ)	○	○(ネ)	○ネ	○ネ	○ネ	○ネ
[8] お化け	○(ネ)	○(ネ)	○ネ	○(ネ)	○ネ	○(ネ)	○	○ネ

一部で「ケン」が許容されず[5]「オラー コノヘンデ タイサンスルバイ。」【A】のように終助詞「バイ」が回答されたが、「ケン」は基本的に使える。また、「ケン」は「ネ」との連接形も可能である。ただ、「ネ」はIと異なり文末では必須の場合もあった。一方、「ケンヨ」「ケンバイ」「ケンタイ」はIIの文末用法では全ての話者に許容されない。

加えて、倉吉方言におけるIIの調査結果を【表2-3】に示す。

表 2-3 倉吉方言：II. 首都圏方言の「から」に見られる文末用法

	A	B	C
〔1〕 買い物	○	○	○ナー
〔2〕 お茶	○	○	○ナー
〔3〕 靴	○	○	○ナー
〔4〕 頼んだ	○ (ナー)	○ナー	○ナー
〔5〕 帰る	○ナー	○	○ (ナー)
〔6〕 車	○ナー	○ (ナー)	○ナー
〔7〕 捨てる	○ナー	○ (ナー)	○ナー
〔8〕 お化け	○ (ナー)	○ナー	○ナー

文末でも「ケー」は使えるが、基本的に終助詞「ナー」が必要という意見があった。II 〔1〕であれば「チョット カイモノニ イッテクルケーナー。」【C】といった回答がされている。

次に、ここからはIIIの首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法の調査結果をまとめた。首都圏方言の結果は【表 3-1】のようになった。

表 3-1 首都圏方言：III. 首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法

		A	B	C	D	E
話し手の知識	〔1〕 名産品	×	×	×	×	○
その場の知覚	〔2〕 雨	×	×	×	×	×
	〔3〕 襟	×	×	×	×	×
話し手の経験	〔4〕 新聞	×	×	×	×	×
質問への応答	〔5〕 ずっと	×	×	×	×	×
独話的な言明	〔6〕 雰囲気	×	×	×	×	×
聞き手に確認	〔7〕 公園	×	×	×	×	×
話し手の認識	〔8〕 ピアス	×	○ネ	×	×	×
	〔9〕 花火	○ネ	×	×	×	×
	〔10〕 沖縄	×	×	×	×	×
	〔11〕 景色	○ネ	○ネ	×	×	×
	〔12〕 他校	×	×	×	×	×
	〔13〕 外出	×	×	×	×	×
不確かな情報の確認	〔14〕 文化祭	×	×	×	×	×

[2] の単にその場で知覚した事態を知らせる項目では「から」が許容されない。ここでは「あ、雨が降っているよ。」【B】のように終助詞「よ」が使えると回答された。[3]～[5] でも「よ」が自然と回答されており、「から」は許容されない。独話的な言明の[6]では「やっぱりプロの選手はアマチュアと雰囲気が違うな。」【D】のように「な」や「わ」が回答されている。聞き手と共有する情報の確認の[7]では「昨日自然公園にいたね。」【E】のように「ね」が回答され、これらでも「から」は許容されない。

そして話し手の認識を述べて聞き手に確認する項目である[8]～[14]では、「からね」の容認度が低くなっている。[13]の「あの時は生徒が夜に外出すると先生が怒った。」に対して「あー、夜間の外出を怒っていたよね。」【C】のように「よね」が使えるという回答が多かった。

続いて、熊本方言におけるⅢの文末用法の調査結果は【表3-2】のようになつた。

表3-2 熊本方言：Ⅲ. 首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法

		A	B	C	D	E	F	G	H
話し手の知識	[1] 名産品	×	×	○(ネ)	×	×	○	○ネ	○
その場の知覚	[2] 雨	×	×	○	×	○	○	×	○
	[3] 襟	×	×	×	○	×	○	×	×
話し手の経験	[4] 新聞	○ネ	×	○ネ	×	○ネ	○	×	○
質問への応答	[5] ずっと	×	×	×	×	×	○	×	×
独話的な言明	[6] 雰囲気	×	×	○ネ	×	×	×	×	×
聞き手に確認	[7] 公園	×	×	×	×	×	×	×	×
話し手の認識	[8] ピアス	×	○(ネ)	○	○	○(ネ)	×	○(ネ)	×
	[9] 花火	×	○ネ	○(ネ)	○ネ	○ネ	×	×	○ネ
	[10] 沖縄	×	○(ネ)	○(ネ)	○ネ	×	○(ネ)	○ネ	×
	[11] 景色	○ネ	○ネ	×	×	○ネ	○ネ	○ネ	○ネ
	[12] 他校	×	○ネ	○ネ	×	×	×	○ネ	○ネ
	[13] 外出	×	○ネ	○ネ	○ネ	×	×	×	○ネ
不確かな情報の確認	[14] 文化祭	×	×	×	×	×	×	×	×

聞き手に話し手の知識や経験・その場で知覚した事態を知らせる[1]～[4]で首都圏方言の「から」よりは比較的「ケン」を使いやすく、話し手の認識を述べて聞き手に確認する[8]～[13]で「ケン」と「ネ」の連接形が使える点は第2節で述べた通りである。一方、[6]の独話的な言明や[7]の聞き手への確認といった意味で「ケン」は使いにくい。[14]の不確かな情報の確認で「ケンネ」が使えない点も第2節で述べたことと一致する。阪上(2023)でも示したように、「ケン」は話し手の確信的な事態の知らせの意味で文末に用いやすい。そして、ⅢでもⅡの首都圏方言の「から」に見られる文末用法と同様に「ケンタイ」は使えない。Ⅲの[13]の「アーヤ

カンノ ガイシユツバ オコットッタケンネ。」【B】のように「ケンネ」が使える項目で「ケンヨ」「ケンバイ」「ケンタイ」は言わない話者が多い⁸。

一方、倉吉方言では【表 3-3】のようになった。

表 3-3 倉吉方言：III. 首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法

		A	B	C
話し手の知識	1：名産品	○ナー	○	○ナー
その場の知覚	2：雨	○	×	○
	3：襟	○	×	○ナー
話し手の経験	4：新聞	○ネー	×	○ナー
質問への応答	5：ずっと	○	○	○ナー
独話的な言明	6：雰囲気	○ナー	○ナー	○ナー
聞き手に確認	7：公園	×	×	×
話し手の認識	8：ピアス	○	×	○ナー
	9：花火	○ナー	○ナー	○ナー
	10：沖縄	○	×	○ナー
	11：景色	○ナー	○ナー	○ナー
	12：他校	○ナー	○ナー	○ナー
	13：外出	○ナー	○ナー	○ナー
	不確かな情報の確認	×	×	×
14：文化祭	×	×	×	×

聞き手に発話内容を知らせる〔1〕～〔4〕のみならず、質問への応答を表す〔5〕や独話的な言明を表す〔6〕のような、熊本方言で「ケン」が使いにくい項目でも「ケー」が使える。〔6〕であれば「ヤッパリ プロノ センシュワ アマチュアト フンイキガ チガウケーナー。」【C】のように言う。「ケー」が使えないとする話者からは、〔3〕であれば「エリガ タットルデ。」【B】のように終助詞「デ」が回答されている。加えて、ここでもⅡと同様に終助詞「ナー」が必須という回答が多かった。〔1〕では「鳥取のお饅頭⁹が食べたいな。」に対して「メーサンヒンノ オマンジューワ タカイケナー。」【A】といったものである。

そして〔8〕～〔13〕でも基本的に「ケーナー」が使えると回答された。〔9〕の「アノ ハナビワ キレーダッタケナー。」【B】、〔12〕の「ア一 オーカッタケーナー。」【C】のように、

⁸ ただ、これらの連接形は首都圏方言の「からだ」に当たる用法で使える。以下のような例ではこれらを使えるという回答がある。特に「ケンタイ」は話者全員が許容した。

・〔今日は車通りが多いなあ。〕と言われて)

ニチヨービダ {ケンタイ/ケンバイ/ケンヨ}。(日曜日だからだよ。)【A】

これは理由節が焦点で分裂文の述語になっている構文である。つまり文脈中に主節に相当する内容があり、関係付けに近い用法と見なせる。これは本論で対象とする文末用法とは異なる。

⁹ 倉吉方言の時のみ鳥取県に因んだものに例文の内容を変更している。

話し手の認識を述べて聞き手に確認する意味で使える点は熊本方言の「ケンネ」と同様である。加えて、〔14〕の聞き手の方が詳しい不確かな情報の確認に使えない点も熊本方言と共通している。「ケナー」と聞き手に知らせる意味になるという回答がされた。〔14〕では「コトシノ ブンカサイワ チューシカイナー。」【B】、「コトシノ ブンカサイワ チューシダナー。」【C】といった回答があった。これは「中止かな?」「中止だね?」という意味だと考えられる。Ⅲで倉吉Cは「デナー」という形式は言わないと回答しており、「ヨナー」という形式は倉吉方言話者から回答されていない。

5. 「カラ」「ケン」「ケー」の文中用法と文末用法の助詞との連接関係の異同

この結果をもとに、首都圏方言の「カラ」・熊本方言の「ケン」・倉吉方言の「ケー」の文中用法と文末用法における助詞との連接関係の異同を考察する。第4節で示した結果をまとめると(16)のようになる。これは、2.4で触れた渡辺(1968)や南(1993:54)の「か」「さ」「わ」→「よ」→「な」「ね」という終助詞の階層構造に基づく連接関係を参考にした。連接可能な形式の境界に+を記す。

(16) a. 首都圏方言の「カラ」

文中: カラ + {ヨ(位相制限有)・サ・ネ}

文末: サ¹⁰

ワ・カ + ヨ + {ネ・ナ}

カラ + {ネ・ナ}

b. 熊本方言の「ケン」

文中: ケン + {タイ・ネ}

文末: ヨ・バイ・タイ + {ネ・ナ}

ケン + {ネ・ナ}

c. 倉吉方言の「ケー」

文中: ケー + ナー

文末: ヨ・デ

ケー + ナー(必須性高)

まず首都圏方言では文中の「カラ」に「サ」「ネ」が連接でき、位相は限られるが「ヨ」も連接できる。一方で文末用法では専ら「ネ」の類が連接する。「帰りは車で送ってあげるからね。」といったものである。ここで「カラ」に「ヨ」や「サ」が連接すると間投助詞と捉えられる。これは調査結果で「カラサ」「カラヨ」は後に続く内容がないと不自然とされたことからも分かる。

¹⁰ 方言によっては「サ」に「ヨ」「ネ」「ナ」が連接することがあるが、首都圏方言では連接しないのでこのように記す。

次に、熊本方言の「ケン」は文中の場合間投助詞として「タイ」と「ネ」が連接するが、文末用法では専ら「ネ」の類が連接する。これには、III [11] の「阿蘇山から見える景色は良かったよ。」に対して「アレワ ヨカケンネ。」ように話し手の認識に言明して聞き手との共有を確認する意味用法がある。このような文末用法で「ヨ」「バイ」「タイ」は「ケン」と連接しない。

そして倉吉方言の「ケー」はどちらにおいても「ナー」が連接できるが、文末用法の方が「ナー」の必須性が高く、文中では任意となる。また、倉吉方言の「ケー」も熊本方言の「ケン」と同様に、話し手の確信的な事態の一方的な知らせの意味で文末に使える。IIIの回答にあるように、「デ」が使える例で「ケー」も使えると回答されている。加えて、倉吉方言で「ヨ」「デ」と「ナー」は連接しない可能性がある¹¹。このため上のような階層構造に位置付けた。

以上のことから、これらの接続助詞は首都圏方言の「ヨ」・熊本方言の「ヨ」「バイ」「タイ」・倉吉方言の「ヨ」「デ」が使われる形態統語環境で使われ得る。つまり、これらの終助詞と同じモダリティ階層に位置し、これらと範例的な対立関係にあると考えられる。

6. 結論と課題

本調査の結果、首都圏方言・熊本方言・倉吉方言の理由の接続助詞の文中用法における間投助詞との連接関係と文末用法における終助詞との連接関係には共通点もあるが、差異もあることが分かった。これらの接続助詞の文末用法は、首都圏方言の「ヨ」・熊本方言の「ヨ」「バイ」「タイ」・倉吉方言の「ヨ」「デ」が使われる形態統語環境で使われ得ることが明らかになった。ここから、文末で使われるこれらの接続助詞は上の終助詞と範例的な対立関係にあると考えられる。第1節で触れた接続助詞の終助詞化の意味・用法面の記述は今後の課題である。また、倉吉方言の終助詞間の連接関係は、今後さらなる調査が必要となる。

参照文献

- 秋山正次 (1983) 「熊本県の方言」 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 9—九州地方の方言一』 東京：国書刊行会。
- 神部宏泰 (1991) 「九州方言の総括的解説：文法」 九州方言学会編『九州方言の基礎的研究 改訂版』 東京：風間書房。
- 神部宏泰 (1992) 『九州方言の表現論的研究 研究叢書 108』 大阪：和泉書院。
- 許夏玲 (2002) 「話し言葉における文末表現と終助詞「ネ」「ヨ」の共起関係—「ネ」「ヨ」が付かない文末表現を中心に—」『言葉と文化』 3: 111-126.
- 小矢野哲夫 (2017) 「倉吉方言の言いさし文—行くけえ。知らんに。—」 倉吉ことばの会 第3回講演会。
- 国立国語研究所編 (1989) 『方言文法全国地図』 第1集 助詞編 財務省印刷局。
- 阪上健夫 (2023) 「熊本方言における順接確定条件節の主節化」『日本方言研究会研究発表会発表

¹¹ この点は詳細に調査していないため、今後の課題となる。

- 原稿集』第 116 回: 17–24.
- 白川博之 (1991) 「「カラ」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要』2 (39) : 249–255.
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』東京: くろしお出版.
- 陳常好 (1987) 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』6 (10) : 93–109.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』東京: ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』東京: くろしお出版.
- 野田惠子 (1993) 「終助詞「ね」と「よ」の機能: 「よね」と重なる場合」『言語文化と日本語教育』6: 10–21.
- 蓮沼昭子 (1992) 「終助詞の複合形「よね」の用法と機能」『対照研究—発話マーカーについて』筑波大学つくば言語文化フォーラム 63–77.
- 林四郎 (1960) 『基本文型の研究』東京: 明治図書.
- 藤原与一 (1986) 「方言文末詞〈文末助詞〉の研究 (下)」『昭和日本語方言の総合的研究』3 東京: 春陽堂書店.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』東京: くろしお出版.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』東京: 大修館書店.
- 湯浅千映子 (2003) 「鳥取方言の談話展開の方法: 情報単位という観点から見た情報の内容・機能とその配列について」『学習院大学人文科学論集』12: 103–132.
- 湯浅千映子 (2004) 「鳥取方言の談話展開の方法-情報の配列と文末形式「ケー」の関連について」『學習院大學國語國文學會誌』47: 74–61.
- 和田礼子 (2009) 「方言教材開発のための熊本方言分析の試み—文末詞タイと、接続助詞ケンについて—」科研報告書『地方中核都市在住外国人のための方言教材の開発—その理念の構築と実際—』1–18.
- 渡辺実 (1953) 「叙述と陳述—述語文節の構造」『国語学』13・14: 20–34.
- 渡辺実 (1968) 「終助詞の文法論的位置—叙述と陳述再説」『国語学』72: 127–135.